

デジタル化と貿易紛争——日独間の緊密な協力のとき

ゲルハルト・ヴィースホイ (Gerhard WIESHEU) ベルリン日独センター評議会議長

世界は急速な技術変遷の只中にある。この変遷のスピードを決めているのが米国と中国であり、ドイツと日本がはるかに遅れをとっていることは、先進国株式市場に如実に表われている。というのも、IT (情報技術) 上場企業の85パーセント以上を米国企業が占め、日本企業は約5.4パーセント、ドイツ企業はわずか2.4パーセントにすぎないからである。中国にはまたファーウェイ・テクノロジーズ、テンセント、アリババ・グループ・ホールディングといった世界的なヘビー級企業が3社存在するだけでなく、急成長中の新テクノロジー企業が数多くある。新しいデジタルテクノロジーは普遍的に適用可能であるため、従来のビジネスモデルに対して大きな破壊力を有している。メディア部門、小売業、金融部門等で地盤を固めてきた企業の多くは、今では過去の栄光にすがりつつ存続のために戦っている。このような状況下、伝統的なセクターにおける既成企業の収益は2011年以来横ばい傾向にある一方、音楽業界のなかでも技術セクターは大幅右肩上がりの利益を上げている。米国と中国が成功している大きな理由として、デジタル商品にはそれ以外の有形財産とは異なるルールが存在することが挙げられる。すなわち、デジタル商品の多くはある企業固有のものであり、その商品には単一流通市場しか存在

しない。したがって、銀行融資の担保として預け入れることは不可能であり、デジタルビジネスの資金調達は主に自己資本——米国ではベンチャーキャピタルによる出資、中国では国による出資——ということになる。さらに、デジタル商品は簡単にコピー可能なため、企業は投資リスクを回避し、結果として投資が増えない。米国ではベンチャーキャピタル企業が複数の企業に投資することが多いため、個々の企業の知的財産損失による悪影響は多角化を通じて緩和される。また、中国では政府が補助金を投入することで「市場の失敗」を是正している。一方、ドイツおよび日本では借入資本による資金調達が主流であり、国は資金拠出の舞台からどちらかという撤退傾向にある。

米国と中国間の技術競争は、従来世界大国であった米国と極東で台頭する勢力 (中国) 間の多数の問題のひとつにすぎず、デジタル化において市場経済主義が優勢な体制 (米国) と国家支配が優勢な体制 (中国) のどちらが世界的規模で優位に立つかの争いである。その際、2035年には中国軍事費が米国軍事費をしのぐ可能性があるという国際機関試算を米国は見過ごすことはできない。すなわち、米国は依然として強者の立場にあるものの、今後数年間でそ



© Bankhaus Metzler

の立場が急速に失われる可能性があるからこそ中国との貿易紛争で高いリスクを冒すこと、さらには第二次世界大戦以降に構築されてきた世界貿易システムを崩壊の危機にさらすことさえ辞さないのである。このような状況に直面する世界各国の企業は不安を抱き、新規投資を控える。世界的規模の貿

目次

巻頭寄稿文	
デジタル化と貿易紛争	
ゲルハルト・ヴィースホイ	1~2
会議報告	
ユニバーサルデザイン	3
人的交流事業	
日独ヤングリーダーズ・フォーラム	4
2019年秋事業報告	5
2019年秋文化事業報告	6
2020年事業案内	7
能狂言公演	8

易紛争の二次被害は世界的な景気回復であり、これが景気後退へ移行する危険性を孕んでいる。日本の産業は、景況指数上ではさほど衰退しておらず、国際比較でみるかぎり依然として好調に推移しているようである。それとは反対にドイツの産業は深刻な不況に陥っている。興味深いことに、金融危機当時のドイツ工業生産の落込みはピーク時の2009年4月でマイナス23.6パーセントで、日本のピーク時の2009年2月のマイナス35.7パーセントよりも落込み幅が狭かった。しかしながら、今回はドイツが大きな打撃を受けたようであるが、それはドイツ工業が自動車セクターおよび資本財セクターに強く依存しているからである。さらに、対英輸出および対トルコ輸出が大幅に落ち込んでいることもマイナス要因となっている。反対に日本工業は人口動態の変遷による労働者不足のため、世界的規模で不確実性が高まるなかでもデジタル化および自動化に大なり小なりとも投資せざるを得ないようである。たとえば、短観調査(日本銀行の全国企業短期経済観測調査)によると、大企業は今年度の設備投資を大幅に増やすことを計画している。日本とドイツは上述のようにソフトウェアおよびインターネットプラットフォームの分野において大きく遅れているが、世界有数のロボット展開率が示すようにハードウェアで秀でている。

第二次世界大戦後ドイツと日本は米国の支援を得て国の復興を図り、以来米国の緊密な同盟国である。日独両国は米国との自然な緊密さにもかかわらず、将来的大国間(米中間)の紛争が危険な規模までエスカレートすることを防ぐための調停役を担うよう努める

べきである。というのも、気候変動を——専門家の一部は「人類存続のための戦争」とすら呼ぶ——いつの日か制御するためには、主要経済圏間の協力は必要不可欠な前提条件だからである。また、欧州連合(EU)と日本は、孤立と保護主義へ向かう米国の危険な勢いを抑止するために、米国とのより緊密な貿易統合に向けて協力するよう努めるべきである。また、日本EU経済連携協定(EPA)の象徴的な機能も過小評価してはならない。試算によると、日EU間の通商は今後数年間で300億ユーロ以上増加する可能性がある。EUと日本は世界に対し、今日でもなおパートナーシップに基づいて両当事者が利益を得る現代的な協定締結が可能であることを示した。さらに、EUと日本は、技術的に米国と中国に再び追いつけるように協力して努力すべきである。その際、共同研究の取り組みを深化させる方法と、EUと日本が共通の経済圏として独自の技術標準を設定する方法を検討することを推奨する。ひとつの好例は、EUと日本間の個人情報相互移転に関する枠組みである。そして、EUと日本は過度の官僚化のリスクにも同時に注意を払うべきである。すでにEUの企業から、官僚制度が蔓延して新規投資のインセンティブが大幅に削減される危険性があるとの声が上がっている。デジタル化および自動化に欧州と日本が一緒に取り組めば、とりわけ欧州と日本の高齢化社会にとっての大きなチャンスとなろう。

ゲルハルト・ヴィースホイ(Gerhard WIESHEU)は株式会社B・メッツラー・ゼール・ゾーン& Co. ホールディング(フランクフルト)のパートナーです。

「jdzb echo」読者の皆様

今号の巻頭寄稿文において、ゲルハルト・ヴィースホイ(Gerhard WIESHEU)ベルリン日独センター評議会議長は日独協力関係の一層の緊密化を提唱しております。通商戦争が怖れられると同時に、気候変動をはじめ我々の存在を脅かすグローバルな課題の山積する今こそ、日独協力には多くの可能性がみられます。

また、先般ヴィースホイ議長が評議会議長として再選されたことを皆様にお伝えできるのを喜ばしく存じます。ここに改めて議長への祝意を表させていただくとともに、これまでのご支援に関係者一同感謝しつつ、これからの数年間をともに歩むことに大きな期待を寄せる次第です。

さて、2019年はベルリンと東京が友好都市関係を締結して25周年にあたります。2020年には東京でオリンピック・パラリンピック競技大会が開催されます。これを機に、11月にはベルリンと東京の都市計画におけるユニバーサルデザインをテーマとしたシンポジウムを開催しました。同シンポジウム報告を今号に掲載しておりますのでご一読ください。

また、年末にあたり、毎年恒例のように来年2020年に計画している会議系事業および文化事業の一覧も掲載しました。多くの皆様がお関心をお寄せくださり、来年もまたベルリン日独センターでお目にかかれまますようお願いしております。

皆様、どうぞ良きクリスマスと健やかな新年をお迎えくださいますように。

クラウディア・シュミッツ(Claudia SCHMITZ)
ベルリン日独センター事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙「jdzb echo」は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター(JDZB)
編集 ミヒャエル・ニーマン
(Michael NIEMANN)
E-Mail mniemann@jdzb.de

著者名が明記されている記事は著者の意見を反映するものであり、必ずしも編集部意見と一致するものではありません。

連絡先

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書館の開館時間は火曜日と水曜日正午～午後6時、木曜日午前10時～午後6時です。蔵書借り出しも可能です。

日独シンポジウム「東京とベルリン——ユニバーサルデザインのまちづくり

アンドレアス・エーダー＝ラムザウアー (Andreas EDER-RAMSAUER, ベルリン自由大学)

2019年11月11日にベルリン日独センターで開催された日独シンポジウム「東京とベルリン——ユニバーサルデザインのまちづくり」は、学術、デザイン、行政、経済各界からの参加を得て、都市空間に真にインクルーシブ(包摂的)でユニバーサル(万人向け)な環境を整えるための道のりとチャンスについて話し合う場となった。障害の有無や度合いにかかわらず、あらゆる年齢の人々に社会のあらゆる分野への同等のアクセスを確保することは、障害者権利条約等の価値観に基づく問題提起やそれにともなう課題とともに、少子高齢化に直面する日独において特に喫緊に具体化しなければならない社会全体の任務である。開会の辞においてベルリン日独センターのクラウディア・シュミッツ事務総長(Claudia SCHMITZ)、また共催者として挨拶した国際交流基金ケルン日本文化会館の相澤啓一館長(Prof. Dr.)はともに、多様性を抽象的に追及するのみならず具現化しようと思うならばユニバーサルデザイン(UD)が必要であることを指摘した。今年にはベルリン東京友好都市関係締結25周年目にあたり、また2020年にはオリンピック・パラリンピック競技大会が東京で開催される。これを、国際的な意見交換を通じてUDのテーマを特にバリアフリーとインクルージョンという意味でさらに前進させるための好機と捉え、本シンポジウムは企画実施された。

シンポジウム第一部ではまず、シンポジウムのテーマである日独のUDを学術的に考察する二つの基調講演により、議論の枠組みが設定された。川内美彦(Dr., 一級建築士・工学博士、アクセスプロジェクト主宰、アクセスコンサルタント)は本分野をリードする研究者で、日本におけるUD推進者でもある。同氏はUDを恒常的なプロセスと理解すべきであり、その際に最終目標はなく、常にインクルージョンと機会均等の向上が追求されつづけるとした。すでにプロジェクトのコンセプト作成段階においてUDが流動的な「design for all」(万人のためのデザイン)であり、静止的な「one design for all」(万人用の単一デザイン)とは区別しなければならないと述べ、ニーズが流動的である前者ではデザインを常に見直し調整する必要が生じつづけるとした。それによりいわゆる「スパイラルアップ」(上向きスパイラル)の発展プロセスが生まれ、あるプロジェク

トには、それ以前のプロジェクトの評価とユーザー経験が生かされるという基調講演であった。つづく基調講演者ヴォルフガング・ザットラー(Dr. Wolfgang SATTLER, ワイマール・バウハウス大学インタラクティブデザイン講座教授)が欠席であったため、同氏の講演は代読された。「UDとはある物の持つ特性というよりもむしろインタラクションと生きる姿勢への問いである」とUDの持つ価値が明白化された。なかでも、テクノロジーと向き合う人間の行動様式について省察した基調講演であった。

第二部ではペリン・チェリク(Pelin CELIK, ベルリン技術経済大学インダストリアルデザイン講座教授)の司会により、UDの実現に関する東京都とベルリン都市州の行政サイドの視点が紹介された。インゲボルグ・シュトゥーデ(Ingeborg STUDE, ベルリン都市州都市開発住宅庁「バリアフリー建設」調整部)は法的枠組みの重要性と、公共事業において当事者や障害者団体をさまざまなフェーズで取り込みながら進めることの必要性を説いた。篠和子(東京都福祉保健局生活福祉部計画課統括課長代理、福祉のまちづくり担当)はオリンピック・パラリンピック競技施設の建設に際して、多様なグループの意見を取り込むよう制定された東京都のガイドラインを紹介した。たとえば、競技会場の異なるゾーンに車椅子用の席を分散して設けることは、このような当事者参画から得られた案である。篠によれば東京都は「スパイラルアップ」のアプローチを踏襲しており、2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会から得られる経験は、将来のための教訓となる。浅田宗(江東区都市整備部まちづくり推進課長)は多様なグループの人々とともに調査目的で実際に街を歩くワークショップの経験、小学校におけるUD出前講座開催、ニーズの異なる人々に公共空間で移動するための情報提供を目的に作成されたUDマップや冊子等を紹介した。三者の発表に共通する結論は、「公共事業のデザインに不可欠の構成要素は、常にさまざまな住民グループを取り込むことと、住民の意識向上に努めること」である。

第三部ではオリバー・ヘルヴィッヒ(Dr. Oliver HERWIG, ジャーナリスト)の司会のもとで革新的なプロジェクトやビジネスモデル

が紹介された。ここで、第一部で基調講演を発表した川内が再び登壇し、東京国際空港(羽田空港)国際線ターミナルのデザインプロセスを取り上げ、UDの要請に従い床模様の選択に至るまで多くの視点やニーズが取り入れられた経緯を報告した。つづいてグレゴア・シュトゥルツ(Gregor STRUTZ, 有限会社インクルーシブデザイン取締役)は自社の担当した「ニコライ教会」博物館の展示デザインでは、触って体験する展示物の作製を通じて障害を持つ者と持たない者の美的世界を結びつけるべく試みたと語った。牛山純子(株式会社日立製作所水事業部社会システム本部情報システムエンジニアリング部)は車椅子利用者から妊婦に至るまで個別で特殊なニーズに合わせて道案内のできるナビゲーション・アプリについて説明した。同アプリを用いれば、たとえば音響式信号機の有無や段差などの移動上の支援ツールやハードル等を考慮した精密なルート案内が可能となる。アンドレ・ハイケンロート(André HEIKENROTH, 公益有限会社アルバトロス「モビダット」担当リーダー)はベルリン市内のバリアフリー情報を収集し提供するインターネットポータルサイト「モビダット」を紹介した。民野剛郎(株式会社ミライロ取締役副社長)は自社の活動と他社へのコンサルティング業務においてインクルージョンを経済的チャンスとして捉えるコンセプトについて語った。最後にクリスティアーネ・バウスバック(Christiane BAUSBACK, 有限会社N+Pインダストリアルデザイン取締役兼チーフデザイナー)からは公共輸送部門に個別のニーズを取り込む必要性についての発表があった。

シンポジウム席上で展開された密な議論から多くを学ぶことができた。特に「Nothing About Us Without Us」(私たちのいないところで私たちのことを決めないで)というスローガンに示されるように、本質的に重要なのは、ニーズが異なる人々がデザインや開発プロセスへ参画することである。UDは常に改善しつづけるというインセンティブを与えるだけでなく、ビルギット・ヴェラー(Birgit WELLER, ベルリン技術経済大学インダストリアルデザイン講座教授)が述べたように、焦点を定めた幅広い参画を得ることにより、最も民主主義的なデザイン技法ともなる。五感を全部用いる経験ができれば、UDは万人に資するものでもある。本シンポジウムは多彩な洞察をもたらし、よりフェアでよりインクルーシブな社会づくりに向けての多くの課題を浮き彫りにした。



第14回日独ヤングリーダーズ・フォーラム「The Future of Globalization – Challenges and Opportunities」サマースクールおよび同窓生大会(2019年9月6日～15日)報告

デラ喜世 (Kiyō DÖRRER) ドイツェ・ヴェレ (独連邦共和国国営国際放送事業体) 経済ジャーナリスト、ベルリン

「日本では、いつもこんなにお祭り気分で盛り上がるの?」とドイツ人ヤングリーダーが怪訝そうながらも感動の眼差しで尋ねた。目の前では、普段はどちらかという控えめな日本人ヤングリーダーズ2名が踊りながらマイクを握りしめ見事な歌声を披露しており、他のヤングリーダーズも大声でコーラスに加わっていた。「Welcome to Japan」と私は笑顔で返した。これは、ドイツ人ヤングリーダーズが生まれて初めて体験するカラオケだったが、ほとんどのドイツ人にとっては訪日自体が初体験だった。これぞ、最高の日本文化入門ではないだろうか。

つづく東京観光ツアーではドイツ人のみならず日本人ヤングリーダーズも人生初の体験に遭遇した。たとえば、東京スカイツリー(ハイライトは高さ450メートルで作業中の大胆不敵な窓拭き職人で、これぞ最高のインスタ映えスポット!)、浅草寺の写真サファリ(インスタには載せられないウズラ料理専門店がハイライトの真逆!)、締めを飾ったのは浅草の炉端焼き(ハイライトは安倍&トランプになった気分)で、「飲み放題」というのもドイツ人の多くには新鮮なサービスだった。

サマースクールには日独合計で16人のヤングリーダーズが参加した。日本とドイツの公務員、安全保障の専門家2名、なんらかの形で報道に係わる者3名、医学博士1名、化学博士1名等である。日曜日の朝、まだ時差ぼけが残る者や、タイトスケジュールの観光ツアーで疲れている者もいるなか、我々はグローバル化のチャンスと課題について討議するために国際文化会館の会議室に集まった。

筆者が参加したワーキンググループでは開始まもなくして、「資本主義の未来?」とホワイトボードに大書された。我々が回答を模索する課題は現代の最大問題ではないにしても、「ネーションステートの未来」「民主主義の未来」「日独

関係の未来」など各々重大な課題である。そのために与えられた時間は8時間で、その時間内に各グループとも30分のプレゼンテーションを用意しなければならない。これを「ハードワーク」と呼ばずして、なんと呼ぼう?

ここで我々を救ったのが日独の専門家による「日本史、ドイツ史」「日本における再生可能エネルギーの導入拡大」「経済構造とグローバル化の歴史」「安全保障政策」「日独関係、国際関係」に関する講義である。しかし、課題解決を模索することに最も役立つのがディスカッションであることに我々ヤングリーダーズはすぐに気づき、多くのディスカッションが繰り広げられた。「人類は超資本主義システムに陥るのか、それとも経済成長後に新たな経済体制が生まれるのか」「日本人とドイツ人が互いの文化を理解するために、どのような方法が存在するか」「日独両国において選挙投票率が落ち込むなか、どのような対策が考えられるか」「ネーションステートが消失してグローバル化したひとつの世界が誕生するのか、それとも分離主義運動が勝利を収めるのか」

ディスカッションの合間には、国際文化会館を後にする機会も時折あった。まず最初に、デジタル化の課題と人工知能(AI)への対処方法について意見交換するために川崎の富士通研究所を訪問したが、ここでも、「アルゴリズムのバイアスにはどのように対処し得るか」「人工知能(AI)の安全を確実に担保するにはどうすべきか」といったさまざまな疑問が浮上した。

世界最大の広告代理店である電通の訪問は特に興味深かった。堂々とした本社ビルへ向かう列車のなかで我々は、近年盛んに議論されてきた電通の劣悪な労働条件——従業員を死に追いやる残業体制や反対意見を容認しないことが多い厳格な管理体制——について討議し始めた。そして、電通訪問後、ワーキンググループに戻ってからもまさにこの点を中心にディスカッションした。

次の訪問先テュフラインランドジャパン株式会社は土曜日にも係わらず我々ヤングリーダーズおよびヤングリーダーズ・フォーラム同窓生を迎え入れ、新横浜本社を案内してくれた。そこでは安全試験中のプロトタイプ製品や機器がしばしば覆い隠されており、写真撮影が許可されなかった(企業秘密!)ことで、我々のブイブイピー感が否応なしに高まった。

サマースクール期間中は普段はビジネスカジュアル指定だったが、ある晩——着任したばかりのイナ・レーベル(Ina LEPPEL)駐日ドイツ大使主催のレセプションに出席するために——持参してきたジャケット、ハイヒール、ネクタイを披露する機会もあった。

回答模索中の課題は深刻だったが、夕方にはそれほど深刻でないテーマを取り上げるディスカッションラウンドの時間ももあった。たとえば、すき焼き、寿司、刺身、居酒屋の小鉢に関するディスカッションである。もちろん、カルピス、ホッピー、日本酒、緑茶サワー、グレープフルーツサワーといった地元の飲み物を決死の覚悟で試す者もいた。

サマースクール最後の同窓生大会では、ヤングリーダーズ・フォーラムでは「飲みニケーション」が伝統となっており、これが同窓生をつなぎ合わせる秘訣であることが如実になった。過年度のドイツ人同窓生達も日本に飛んで同窓生大会の企画実施に協力し、2019年のサマースクールの評価会にも参加した。多くの同窓生が述べるように、ヤングリーダーズ・フォーラムの真髄は人間関係にある。

そして、我々2019年ヤングリーダーズも、人間関係を重視している。我々のLINEグループには、サマースクール終了後の再会写真がつぎつぎと掲載されている。東京における気候変動反対デモ、デュッセルドルフでのライン川散策、ふと思いついてベルリン市庁舎を訪問——これら写真が示すように我々ヤングリーダーズは結ばれており、結ばれつづけ、そして願わくばマイク片手に一緒にカラオケで大声で歌い踊る日もまためぐってくるであろう。





第三回シンポジウム「グローバルヘルスにおけるドイツと日本の役割」(2019年10月25日、於ベルリン日独センター)

協力機関:ジュネーブ国際開発研究大学院グローバルヘルス・センター(G I / G H C)、国立研究開発法人国立国際医療研究センター(N C G M)国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター(i G H P)(東京)、ハイデルベルク・グローバルヘルス研究所(H I G H)、世界医学サミット(W H S)、登記社団研究開発部門を有する製薬会社連盟(v f a)(ベルリン)

第3回ワールドヘルスサミットに併せて開催した本シンポジウムでは、2019年6月に開催された大阪G20サミット以降の成果を中心に討議しました。

マサチューセッツ工科大学政治学部のリチャード・サミュエルズ教授(Prof. Richard SAMUELS)が新著『Special Duty – A History of the Japanese Intelligence Community』(特殊任務——日本の情報・諜報機関の歴史)を紹介する講演会を開催しました(2019年10月9日、於ベルリン日独センター)。

サミュエルズ教授は講演につづいて、ベルリン自由大学副学長のヴェレーナ・ブレッヒンガー＝タルコット教授(Prof. Dr. Verena BLECHINGER-TALCOTT、ベルリン自由大学東アジア研究所)と対談し、聴衆からの質問やコメントにも応えました。



日独シンポジウム「リーガルテック——法および司法における人工知能——チャンスとリスク」(2019年10月4日、於慶應義塾大学)

協力機関:独日法律家協会(ハンブルク)、フリードリヒ・エーベルト財団東京事務所、ドイツ連邦弁護士会(ベルリン)、ドイツ科学イノベーションフォーラム東京、慶應義塾大学法学部(東京)

写真はマーガレータ・ズートホフ(Dr. Margaretha SUDHOF)独連邦司法消費者保護省次官と独日法律家協会のヤン・グロテア(Dr. Jan GROTHEER)理事長。



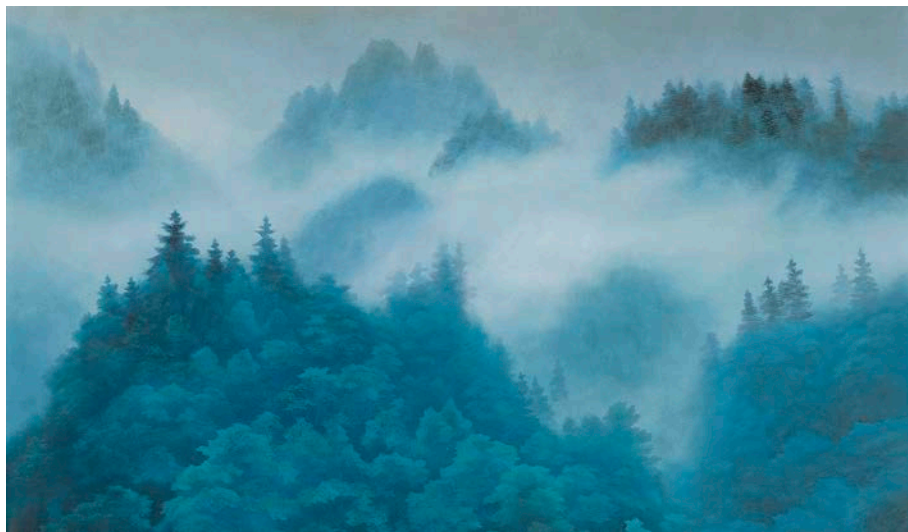
ワークショップ「紫外線発光器・照射器の最先端と将来への期待」(2019年8月28日～29日、於ベルリン日独センター)

協力機関:科学技術振興機構(東京)、ベルリン工科大学、名城大学(名古屋)



渡辺紫乃(上智大学国際関係論教授) & 古賀慶(シンガポール南洋理工大学政治学・国際関係論教授)講演会「東南アジアにおけるインフラストラクチャー計画および財源手当て——日中比較」

2019年9月5日、於ベルリン日独センター



東山魁夷展「朝雲」(2019年11月28日～2020年2月28日、於ベルリン日独センター)

昭和を代表する日本画の巨匠東山魁夷(1985年～1994年ベルリン日独センター評議員)の没後20周年に当たる本年、ベルリン日独センターにご寄贈いただいた作品「朝雲」をはじめ多数のリトグラフを展示します。(写真:「朝雲」東山魁夷 © v. BRUCHHAUSEN/ベルリン日独センター)



映画上映会「特急三百哩」(三枝源次郎監督、1928年)(2019年11月14日、於ベルリン日独センター)

本映画のベルリン初上映に当たり、無声映画の伴奏音楽で国際的に名の知られているギュンター・ブーフヴァルト(Günter BUCHWALD)が、サイレントムービー・ミュージックカンパニーの音楽家と共に即興生演奏を行ないました。



展覧会「SPAGAT」(2019年9月20日～11月15日、於ベルリン日独センター)金原明音とロール・カテュジェ(Laure CATUGIER)の写真、ドローイング、インスタレーションから成る本展覧会のオープニングイベントでは、高橋まりえ(ピオラ)とヨアン・サラ(Yoann SARRAT、ブレイクダンス)のパフォーマンスをお楽しみいただきました。

会議系事業

国際社会における日独の 共同責任

国際(独日尼)会議「三ヶ国協力」

協力機関:独連邦外務省(ベルリン)

開催予定日:2020年第1四半期、ジャカルタ市開催

日独シンポジウム「変遷する国際秩序における日本とドイツの役割」

協力機関:コンラート・アデナウアー財団(ボン)、ドイツ国際安全保障研究所(ベルリン)

開催予定日:2020年4月、東京開催

日独会議「欧州連合と日本の関係——戦略的パートナーシップ協定を超えて」

協力機関:日欧先端研究ネットワーク(ストックホルム商科大学)、ベルリン自由大学
開催予定日:2020年6月5日～6日

国際(日独仏)会議「ユーラシアのインフラストラクチャーと今後の展望について」

協力機関:フランス国立社会科学高等研究院(パリ)

開催予定日:2020年7月

1.5トラック(官民対話)形式で実施する「日独安全保障ワークショップ」

協力機関:日本国外務省(東京)、独連邦外務省(ベルリン)

開催予定日:2020年秋、東京開催

日独会議「軍縮および国連の役割——日独の視点」

協力機関:フリードリヒ・エーベルト財団(ベルリン)

開催予定日:2020年未定

シンポジウム「グローバルヘルス IV」

協力機関:国際・開発高等研究所グローバルヘルスセンター(ジュネーブ)、国立国際医療研究センター(東京)

開催予定日:2020年未定、東京開催

持続可能性および環境

日独エネルギー転換評議会(GJETC)

協力機関:ヴッパータール気候環境エネルギー研究所、ヘンニッケ・コンサルト、エコス・コンサルティング&リサーチ、日本エネルギー経済研究所(東京)

開催予定日:2020年3月18日～19日

日独シンポジウム「バイオエコノミー」
協力機関：ドイツ語圏日本学術振興会研
究者同窓会(ボン)
開催予定日：2020年5月15日～16日

日独会議「気候に優しいモビリティ」
協力機関：ドイツ経済研究所(ケルン)、富
士通総研(東京)
開催予定日：2020年5月

少子高齢化社会

日独シンポジウム「少子高齢化社会とヘル
スケア」
協力機関：独連邦保健省(ベルリン)、日本
国厚生労働省(東京)
開催予定日：2020年2月6日～7日

日独会議「日独コミュニティの高齢化お
よび地元における介護」
協力機関：ドイツ日本研究所(東京)、ドルトム
ント大学、三菱総合研究所(東京)
開催予定日：2020年3月17日～19日、
東京開催

日独シンポジウム「少子高齢化対策——日
独の事例」
協力機関：独連邦家庭高齢者女性青年
省(ベルリン)、日本国厚生労働省(東京)
開催予定日：2020年5月、東京開催

デジタル化の進む社会

日独会議「労働の未来とデジタル化」
協力機関：信州大学(長野)、フラウンホー
ファー応用研究振興協会通信技術研究所
(ザンクト・アウグスティン)
開催予定日：2020年10月29日

国際シンポジウム「中国との研究イノベー
ション協力」
協力機関：ベルリン・メルカトル中国研究所
開催予定日：2020年10月

国家、企業、ガバナンス

日独パネルディスカッション「現在みられる
国境を越えた若者の環境運動」
協力機関：青山学院大学(東京)
開催予定日：2020年3月初旬

日独パネルディスカッション「2020年オリ
ピック競技大会——大規模スポーツイベ
ントの社会的・政治的・経済的意義」
協力機関：ドイツ日本研究所(東京)
開催予定日：2020年4月2日

日独会議「研究、教授、コミュニティ活動
を通じた大学のプロフィール形成」
協力機関：ドイツ大学学長会議(ボン)、
国立私立大学団体国際交流担当委員長
協議会(東京)
開催予定日：2020年6月22日～23日

日独シンポジウム「スポーツ法」
協力機関：独日法律家協会(ハンブルグ)
開催予定日：2020年未定、ミュンヘン開催

国際会議「移民にとって魅力的な国と
は——日独仏三ヶ国比較」
協力機関：デュースブルク・エッセン大学
開催予定日：2020年未定

文化と変遷

映画上映&対談会「北海道の世界」
協力機関：ドイツ考古学研究所(ベルリン)、
北海道庁環境生活部文化振興課縄文世
世界遺産推進室(札幌)
開催予定日：2020年2月13日

日独建築対談シリーズ
協力機関：ドイツ建築家連盟(ベルリン)、
ベルリン工科大学
開催予定日：2020年未定

特別事業

日独フォーラム第29回全体会議
協力機関：日本国際交流センター(東京)
開催予定日：2020年秋

文化事業

展覧会

東山魁夷没後20年記念展「朝雲」
ベルリン日独センター所蔵のリトグラフ
「濤声」「京洛小景」シリーズや孔版画など
展示期間：2019年11月28日～2020年2月28日

「Lost in Transformation」
ペインティングとインスタレーション。
松原勝彦、カイル・エグレット
オープニング：2020年3月13日、19時
展示期間：2020年3月16日～6月19日

コンサート

ニューイヤーコンサート2020
アニア・フィロコフスカ(バイオリン)、
佐藤晴真(チェロ)、久末航(ピアノ)
開催予定日：2020年1月16日、19時

現代曲コンサート
マウリツィオ・バルベッティ(ヴィオラ)、
井上郷子(ピアノ)
開催予定日：2020年11月27日、19時

講演会

「欧州における歌舞伎の影響」
長谷部浩(演劇評論家)
開催予定日：2020年4月

その他

ベルリン日独センター2020年オープンハウス
2020年6月13日(土)、14時開始

人的交流事業

- ・日独若手専門家交流
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・日独青少年指導者セミナー
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・JDZB SCIENCE YOUTH PROGRAM

各プログラムの詳細はwww.jdzb.de
→ 人的交流事業

展覧会観覧時間

月曜日～木曜日10時～17時
金曜日10時～15時30分

文化事業の申込み受付開始日は追ってお
知らせします。

会場について別途記載のない場合はベル
リン日独センターで開催します。
詳しくは www.jdzb.de → 個別事業



ベルリン市民に本格的な能を紹介する貴重な機会となったベルリン公演の実現に向け、ベルリン日独センターは協力機関として尽力しました。日本から招聘された梅若研能会(東京)を主宰する梅若家は日本最古の能楽師の家系のひとつであり、日本を代表する能楽師集団として知られています。上演された三つの古典演目では、それぞれ異なる独特の世界が繰り広げられ、その世界観が登場人物たちの所作や能装束にも表れていました。舞台には、梅若家のシテ方のほか、ワキ方、狂言方や囃子方などによって構成された顔ぶれが揃いました。

最初の演目は、伝説的な架空の生物である酒の霊「狸々」を中心に展開する「狸々乱双之舞」でした。狸々(シテ)は親孝行の農夫(ワキ)に汲めども尽きぬ酒壺を与えます。二人の役者が狸々(シテ、ツレ)を演じ、ともに赤く長い乱れ髪と赤い顔の面をつけて舞い謡います。(写真1)

次の演目は狂言の「雷」で、若い薬師が、空から落ちて腰を打った雷神をみつめて鍼治療をする話です。深刻な題材の能の演目とは対照的に、狂言でははるかにダイナミックな動きで展開し、そのかわり囃子は抑えめです。(写真2)

最後の演目はベルリン公演のクライマックスとなった能の「恋重荷」。現在約200人存在する女性能楽師の一人である梅若紀佳が演じる優雅な女御(ツレ)に恋心を抱く老いた庭師の莊司(シテ)の物語です。公演中最も印象的な能装束は、後半で亡霊となって登場する莊司がまどう何層も重なる黄金と白と黒の豪華な織物で、観客に雪山を髣髴させるものでした。(写真3)

本公演はケルン日本文化会館の創立50周年記念ヨーロッパ巡回公演(チューリッヒ→バーゼル→ケルン→ベルリン)の一環として、また東京ベルリン友好都市提携25周年記念として実施されたもので、ベルリン日独センターの協力の下、ベルリン・フェスティバル公社ベルリン音楽祭および国際交流基金ケルン日本文化会館が共催しました。

本稿はフェリシタス・ブランク(Felicitas BLANCK、ベルリン在の文化ジャーナリスト)の文章の抜粋で、全文は www.jdzb.de に掲載されています。

写真 © アダム・ヤーニッシュ(Adam JANISCH)



梅若研能会のベルリン公演を機に、ベルリン日独センターはその前宣伝も兼ねてアネグレート・ベルクマン(Dr. Annegret BERGMANN、ベルリン自由大学)講演会「能——ミニマリズムの魅力」(2019年8月22日)を開催して、能の歴史や欧州における受容について解説しました。また、公演当日(2019年9月3日)には会場のベルリン・フィルハーモニーのホワイエで、ハインツ＝ディーター・レーゼ(Heinz-Dieter REESE、ケルン日本文化会館)が能楽入門のプレゼンテーションをしました。